

船井情報科学振興財団 留学生レポート

2016年6月

澤田 真行

はじまったばかりだと思っていた PhD コースもはや三年目が終わり、時の流れの早さに驚きを隠せません。Yale 大学経済学部で留学中の澤田です。

三年目も終わりますと、決められた授業などの一律の課程は過ぎ去りまして、各々の研究に没頭する生活となります。とはいえ、理系の他分野の方々と異なりラボなどありませんので、基本的には一人で黙々と研究に励み、一、二週に一度程度教授と面談をして進捗を報告するという形になっています。

本日は一時帰国中に参加させていただいた西日本でのセミナーでの発表を済ませ、帰りの新幹線に揺られうつらうつらしながら冒頭を書き連ねています。三年目は大変に実りのある一年でありました。一年目、二年目と少しばかり研究すべき分野に悩み苦戦しておりましたが、幸いなことに興味関心の見事に合う教授が他校から帰ってきたことでやっとのこと腰を据えた研究活動が始められているという印象です。

本校は教育の一環として三年次及び四年次における TA が義務となっており、必然的に教育活動にも時間を奪われるようになったのですが、学部生にどう飽きさせないわかりやすい授業をしようかと苦慮する時間はプレゼンテーションの組み立て方へとつながる学びが得られているのではないかなと考えています。今回は受け持った講義についてのお話と、私の最近の研究分野と進展について短いながらお伝えできればと考えています。New Haven というところはだいたい住み慣れて参りましたが、オフィスと家を往復するだけの典型的な院生の生活になってまいりましてもはや語ることがなくなってきましたので、生活については割愛させていただこうと思います。(無差別な脅威ではありませんでしたが、帰り道に二つブロック先で私怨からの発砲事件があったというのが、今年のハイライトでしょうか。さすがに背筋が凍りました。)

1 教育活動

Yale では基本的には年二コマの TA が義務となっています。義務は義務ということで負担ではあるのですが、Yale はどうやら学部生にシニアの大御所たちがきっちり科目をもつということが売りになっているようで、入門・基礎の部分を学部の講義においてどう飽きさせずにわかりやすい講義を組み立てるのかを学ぶ大変にいい機会でした。

夏学期、冬学期ともに学部向けの講義を担当しまして、夏は一歳前知識のない一年生向けの基礎クラス、冬は数理的に厳密な議論にも興味を持つシニアの学生向けの計量経済額のクラスを担当しました。夏学期初回の仕事は体の大きさほどの箱にボールを詰めたものを運ぶというまさかの肉体労働でしたが、実際に無作為抽出を実演して見せて学生の興味を引くというイントロを見て勉強になりつつ、初学の学部生に教えることの難しさを感じま

した。夏学期、冬学期ともに毎週の TA セッション、宿題の解答作成・採点に追われる日々でティーチングの面白さを感じつつも、研究とのバランスの難しさに苦慮する一年でした。この報告書を書く上で思い立って授業評価をこわごわ見に行きましたが、(お世辞でしょうが) 今までの TA で一番だったなどと書いてくれる学生もいて報われた思いをする一方、来年も頑張らなくてはと身が引き締まる思いです。

2 研究活動

先述しましたとおり、今回の一時帰国では西日本の大学でのセミナーにおいて発表の機会をいただき、最近の進行中の研究についてお話をしてみました。今年に入ってからは一貫して、計量経済学において意思決定モデルの分析に焦点をおいて研究に注力しています。元々、労働経済学の中でも手法中心の興味関心を持ってやってみましたが、今は計量経済学者として手法面での貢献を目指していきたいとの思いです。

現在は労働経済学などの幅広い応用分野で個人の意思決定を表すモデルとして用いられているシンプルなモデルの分析を行っています。50年代に最初に提唱した研究者の名前を借りて Roy モデルと称される非常にシンプルな (英語版 Wikipedia に”one of the easiest works in economics on self-selection” と称されるほど) モデルではありますが、その一般形式は興味関心のあるアウトカム (例えば将来の所得) に基づいて二項選択 (例えば大学進学) がいかに行われるかを表現するための必要最小限の要素が詰まった重要なモデルです。

上に引用しました Self-Selection (自己選択) 問題とは、非ランダムデータの欠損問題の一種ですが、これは経済学の実証研究においてその欠損が意思決定主体の自己選択に基づくときに (i) その欠損が生じなかった場合のアウトカムはいかなる性質を持つのか、(ii) その欠損はどのようなメカニズムによって生じているのか、を興味関心として長年の重要課題となっています。その欠損のメカニズムをどこまで陽に仮定し表現するかによってそこから導くことのできる主張の強さ及びその妥当性が変わってくるのですが、現在にいたっても特に自己選択問題の政策的含意について Roy モデルなどの因果関係を記述するモデルの助けを借りて分析を行う立場と、そのようなアприオリなモデル仮定を一切おらずに分析する立場との間で活発な議論がなされています。私の研究は前者のモデルを基礎とした立場にある一方で、後者の立場からの批判の多いアприオリな仮定をできるかぎり減らしたセミパラメトリックなモデルのもとでどこまで興味のあるモデルのパラメータを得ることができるのか、それらを用いてどのような因果関係の存在有無を示すことができるのかを分析しています。

3 おわりに

私が船井奨学金のおかげもあって本校に留学できるようになってからというもの、同奨学生ではありませんが、続々と後輩が日本からやってくるようになりました。今年も二人の日本人学生が新たに課程に加わるとのことで、嬉しい反面、あとに続く人たちに迷惑をかけ

ぬよう上等な成果を残して卒業を迎えたいと焦っています。順調にいけばあと二年、ということで、ここから一層切磋琢磨したいと考えています。今年からは Faculty としても二名の大変優秀な日本人研究者の方々が本校にいらっしゃることになっています。初めて New Haven で過ごした一年目に比べ、だいぶ賑やかな日本人コミュニティになってきたかなと嬉しい限りです。

何もないところですが、奨学生のみなさま、財団のみなさま、New Haven に何かのおりでお越しの際はご一報ください。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

澤田 真行